

第三百六十九回 青葉会

平成二十八年十二月十六日(木)

師走恒例寄席見物↓年忘れ句会

鈴木演芸場(昼席)

↓神田「岩戸」午後五時半〜八時

〈選者〉

◎

川口孤舟

〈参加者〉

今井紀久男

大林猛

柿崎忠彦

久米五郎太

小西弘子

豊田ゆたか

星田啓子

〈投句〉

《互選句》

六点

◎

するすると紙に切り出す宝船

弘子

(猛・忠・孤・五・ゆ・啓)

四点

◎

訃報また氣勢そがれし忘年会

紀久男

(忠・孤・啓・天)

三点

◎

紙切りに「プーチン」注文暮の寄席

全

(猛・忠・孤)

◎

熱燗をポットに潜め落語席

忠彦

(孤・弘・ゆ)

◎

耳の煤(すす)を笑ひ飛ばすや暮の寄席

弘子

(孤・啓・天)

◎

掛取りに寅さん登場暮の寄席

全

(紀・忠・孤)

幽明の入り交じる如(こと)夜の紅葉(もみじ)

啓子

(猛・五・ゆ)

二点

今井氏の掛け声響く師走寄席

忠彦

(紀・天)

(五：上五↓「紀久男さんの」)

◎

冬霧の霽(は)れ蒼穹の富士高嶺

孤舟

(猛・ゆ)

◎

義太夫のエツヘツヘツヘツヘツへ師走かな

五郎太

(紀・孤)

流刑地や父の十八番(おはこ)のロシアシチュウ

堂哉

(紀・弘)

(天：下五はボルシチの方が良いのでは)

◎

小春日や小犬耳立て寄席太鼓

ゆたか

(孤・啓)

三味の音を耳に残して冬の街

全

(猛・天)

出囃子や所作も真打冬うらら

全

(忠・天)

木枯らしに耳痛くしてふくの鍋

啓子

(五・弘)

紙切りに遅刻のプーチン冬の寄席

天牛

(五・弘)

下仁田の葱が歳暮の友逝けり

全

(ゆ・啓)

歌奴に歳末の掛けみなまかす

全

(忠・五)

枯れ落葉カラカラカラと九段坂

猛

(弘)

酒の酔ひみかんで醒し市馬きく

忠彦

(紀)

厄払ひの市馬の嘶場が締め

全

(紀)

初雪の朝炒飯の宙返り

孤舟

(弘)

ひととせのぼやきを尽し暮の寄席

弘子

(啓)

子らの夢大きく回す木の実独楽

昇

(天)

雪虫が早く舞ふぞと友の文

啓子

(五)

白壁をキャンパスにして鳶もみじ

全

(孤)

溪流を紅葉纏ひつ割る磐(いわお)

全

(ゆ)

●次回青葉会

正月五日(火) 吉例初芝居総見 歌舞伎座(昼の部)

一月二十六日(木) 初句会 午後六時〜八時半 文京区民センター

△ 当季雑詠 各自五句 投句二句

● 恭延さんの追悼句募集

二月二十三日(木)

全

以上文責 紀久男

平成二十八年十二月句会報

一 富士くつきりの冬晴の朝、恭延さんを句会お誘いに電話をしましたら、奥様から二時五十分過ぎに急逝されたとのこと、びっくり驚天した次第です。恭延さんとは、八月末、高橋敏郎さん稲垣真澄さんと神楽坂の信州蕎麦屋で歓談したのが最後で、あと何度かお電話やりとりしただけで残念で堪りません。三十数年のご厚誼に只々感謝申上げ、ご冥福を祈るばかりです。

二 鈴本にゆたかさん御夫妻ら六名参加。ほほ満席なんですが、平日の昼なのに意外と若者が多く驚きでした。高座も気合入つており客の反応もすこぶる良かったのが印象的でした。

皆様の句にありますように市馬、歌奴、紙切りの楽一、漫才のロケット団が喝采を浴び、皆様にも十分愉しまれたようです。

忘年会は天牛さんから九名出席。恭延さんへの献杯で始まり、猛さんの披講で進行しましたが、さっぱり氣勢上がらず仕舞で、恒例の第二部（隠し芸）も無しでした。

恭延さんを偲び乍ら、孤舟さんの作品掲載「俳句四季」11月号と青史さんの句の合評掲載の「萬緑」12月号コピーを回覧。今年腕を上げられ句会報ワープロでも数回担当された猛さんに「歌舞伎座カレンダー」を贈呈。尚俳人協会の「俳句カレンダー」一月に万里子先生の「校庭を球と力走日脚伸ぶ」が掲載されていると堂哉さんから連絡ありました。

三 関係者近詠

灯台へ真つ白な波頭葉月潮

万里子

易水を渡る覚悟か破蓮
流れ星ヒト壊れゆく速さかな

青史

満月の面を雷去り雲走り

全

月天心ものぐるほしきまで赤く

全

字幕また地震速報そぞろ寒

全

寧日も無く長月のをはりけり

全

伐採の標（しるし）付く樹々紅葉谷

全

——「萬緑」—— 12月号

亡き母の胡桃ふさふさ小川縁（をがはべり）

全

稀勢の里の無念共有冬博多

盛雄

夜半目覚む屋根へ胡桃の落ちつづき

全

賀状書く傘寿まではと決めて書く

堂哉

渋柿へ舅が接ぎし柿甘し

全

リンパへの転移の便り湯ざめかな

全

秋蔓に庭を制され親不孝

眞希子

「錦木」を静かに舞ひて年納む

五郎太

玄関戸に施錠三箇所夕化粧

全

自分史にたられればは無し落葉掃く

盛雄

眠られぬほどの屈託雨の月

全

冬眠の小ささいのちに歟無情

全

別れ棲む本州長し台風禍

全

難民や落葉すらなき白砂漠

健介

曼珠沙華大輪米寿の俳句道

全

書を閉ずや桜紅葉を葉とし

全

ぽつかりと土俵明るや望の夜

全

夕映えの冬大ダリヤ睥睨す

紀久男

十六夜のさらさら銀を流すごと

全

華語盛ん紅葉見頃の高尾山

全

猪吊りて帳場に白き蛍光灯

全

——「きさらぎ句会」12月

●万里子先生追加添削（七月句会の句評）

滝壺へ魂（たま）吸ひ込まれゆくごとし

孤舟

↓「滝壺へ魂を忽ち吸ひ込まれ」

（☆：「いとし」「めく」などの比喻を用いると詩力が弱まるので、たとえを使わずに読み込むこと）

四 芳博さんの遺句の内、近詠（松戸・流山地区の「泥几句会」）を抄出してみました。

三輪山の春風ゆらす麵すだれ

掠の群れ空を傾け反転す

高齢者免許講習亀なけり

十六夜の月満ち赤城黒を増す

青梅線鳴きわたるほととぎす

牡蠣割女背の子揺り上げ手休めず

道の駅らつきよは外で売られけり

木の実雨戦死の墓に音降りぬ

遠き日の夢にちちはは浮き人形

寒灸に耐えて背中であひけり

生醬油の匂ひ来る街梅雨入りかな

寒月や心の隙間（すきま）を照らしをり

決められぬ我を囃すや法師蟬

茂吉忌や亡母がつきたる美しき嘘

炎熱や気骨そがれて恋占い

鯨入れ歯切れ良く食ぶ水菜かな

みようが採り思ひがけずも思ひ草

忽然と峠の空から遍路来る